

## 第2回「地方創生研究会」 打合議事録

記録 小平 (v1R1)

(敬称略)

**日時**：2019年12月6日(金) 18時から19時30分

**場所**：一般財団法人アーネスト育成財団内会議室

**参加者**：西河洋一理事長、飯田グループホールディングス(株)吉池富士夫社長付(座長)、  
芝浦工業大学 平田貞代准教授、石井唯行(株)ワンズディー代表取締役、山中隆俊研究員、  
蕪塚功埼玉県秩父農林振興センター管理部担当部長、  
一般財団法人アーネスト育成財団 浅野昌宏理事、小平和一郎専務理事、  
(欠席)小坂哲平小坂建設代表取締役

### 議事内容

#### 1. 打ち合わせ概要

第2回になる「地方創生研究会」を開催した。今回は、埼玉県秩父農林振興センター管理部蕪塚功担当部長が、取り組んでいる地方創生の取り組みに関し報告があった。

#### 2. 提出資料

- (1) 日本開発工学会『第6回総合シンポジウムのご案内 地域創生におけるビジネスモデル』  
(12月14日、日本工業倶楽部)案内
- (2) 地方創生研究会(第1回)議事録
- (3) 蕪塚功『武蔵まつりこと(農政第2戦線)検討メモ』

#### 3. 打ち合わせ概要

##### 3.1 日本開発工学会「地域創生シンポジウム」(吉池座長)

吉池座長から、12月14日(土)13時から日本工業倶楽部にて、日本開発工学会が主催する「地域創生におけるビジネスモデル」と題するシンポジウムがある。基調講演は、モンゴルでビジネス創生に取り組んでいる群馬セラミックス(株)の会長の小貫論氏と、鹿島で介護ビジネスに取り組んでいる(株)くぬぎの森代表の神尾雅陽氏が講演する。

その他、当研究会のメンバーの小坂建設(株)代表取締役の小坂哲平が「沼田の地域再生の取り組み」と題し、(株)ワンズディー代表取締役の石井唯行が、「南総エリアへの移住支援ビジネス」と題し、発表する予定である。

##### 3.2 蕪塚報告「サークルファーム」

**司会(吉池富士夫)**：今日の本題である、蕪塚功から講演をして頂く。

**講師(蕪塚功)**：埼玉県で農政を30年やってきた。理論的より、実践的に取り組んだ「サークルファーム」の事例を報告したい。埼玉県は、埼玉県政策研修誌『彩の国さいたまづくり広域連合政策情報誌』を毎年出す。そこに、サークルファームという考え方を投稿した。今日は、な

ぜ、サークルファームに取り組もうと思ったかをまず話したい。

実際に農村側が補助金をもらってやろうとすると、農村側がお膳立てを全てして、取り組むことになる。やっても、思ったように人が集まらない。3年間くらい取り組んで、補助金が切れてしまうと。終わってしまう。サークルは、都市側が主体とならないと長続きしない。実際に農村側がやるが、思うように集まらなかったりする。高齢化している。役場も農政から、高齢者の所に人が移っている。 9:27

都市と農村の交流の取り組みとして、練馬区などでは体験農園が流行ってきている。ただ、畑で野菜の栽培で、民間会社などの体験農園で成功している事例が出始めている。ただ、水田はうまくいかない。畑のように区画を割って、貸すというのが難しい。田んぼで体験農園をやるとしたら、田んぼを一筆、この区画を丸々使ってやらないと難しい。

都会側にサークルを組んでもらって、むしろ都市対策としてサークルファームを考えている。報告にも書いているが「都市住民のためのコミュニティ活性化や新たな田舎・故郷づくり」と考え、むしろ都市の人のためにと考えている。「大震災も想定した生活安全保障も念頭に置いている」「都市住民が現在の仕事を続けながら農家・農山村と縁を結び、生活の安定と質の向上を両立することを当面の目標とし、その活動を広く社会に波及する運動に関わることを期待している」。若い人たちは、都会生まれの都会育ちが多くなっているので、田舎との関係を持ってもらおうと企画した。

都市住民のやる気が第一で、都市サイドからの要請を受けて農山村サイドが協力するというのが基本的スタンスである。これを継続するには、都市サイドのそれなりの努力と時間が必要になるからである。従来の農山村サイドから発信する都市農山村交流事業は都市住民をお客様扱いしすぎ、行政などの支援がないと継続性と波及性に課題があった。

### **継続性のある運営方法** 11:30

農村側から発信してもうまくいかないというのがある。そのため、サークルファームでは、山間地域の小区画農地にも対応できるよう、その運営方式は個人ではなくサークルを対象として受け入れる農地1筆単位の「農園利用方式」を原則とするとした。これは、1筆の農地を細かく区割りして不特定多数の都市住民を対象とする従来の体験農園の煩雑さを軽減しつつ安定収入を確保するなど、受入れ農家にとっても経済的メリットが感じられるなければ長続きしない。農家に過剰なボランティアを要求すべきではない。そこで、1筆で取れるお米の値段以上の前金で払うと言えば、話に乗ってくれると考えた。農協に販売している前金より、多い金額を支払う制度にした。 12:04

農産物は、できてから市場に出していくらと値段が付く。浮き沈みが大きい。それでもお米は政府が関与して、安定はしているが、過剰生産に中、多少なり変動もする。前金で、農協からもらえる仮払い金より多くのお金を貰えれば良いとした。 13:40

次に都市側のサークルが、「田植えをさせてください」「稲狩りをさせてください」といえるが、あくまでも前提は農家が栽培したものを都会の人は買うことにする。都会の人が、作業をするといってもできないので、農家と都市の人の間にコーディネーターを設けた。13:58

農家の息子が、コーディネーターになってくれた。「米代+コーディネーター代」を払って、

通常のコメ価格の倍近く払った。コーディネーターは、コメ作りを知っていればできる。

セミナーに行って、講演して、その中で「10名くらい集めてくれたら、サークルファームをやろう」としたら女性を中心に集まった。そのプロジェクトを県の仕事として「サークルファーム」を位置付けた。

実施に当たり、その時にサークルファーム運営の基本的考え方を7項目に整理したので、報告する。

(1) サークルファームの利用者は、都市と農山村の調和という目的を共有する仲間である。お客様扱いはされない。一緒に仲間としてやる。

(2) サークルファームは、代表者を定め、農地の地権者（農家）との対応を代表者が責任をもって行うこと。集金し、お金を責任を持って支払う。

(3) サークルファームは、原則的に農園利用方式により運営する。農地の貸し借りではない。農地の貸し借りになると、農地法の対象になってしまう。

農園利用方式とは、栽培するのは、農地の地権者で、そこにサークルファームの人達が手伝いに入るとしている。参加費は払い、生産物は、前金で引き取る契約としている。あくまで、土地から得られる収益は、農地の地権者にある。従って、農地法の適用外としている。土地の貸し借りではないという整理である。例えば、自治体が畑を小さく分けて貸しているが、自治体は農家から借りて、農業委員会の許可を取って取り組んでいる。 21 : 25

(4) サークルファームは、農地の地権者が行う農作業の一部を、農地の地権者の了解を得て体験することができる。したがって農作業の実施に関しては、農地の地権者の指示に従わなければならない。原則は、お米の買取で、農家が主体的にお米の栽培をおこなう。サークルファームは、田植えをさせてもらったり、稲刈りをやらせてもらったりする。やりたければ、草取りもやることできるとなる。実施にあたっては、農地の地権者の許可を得てやると取り決めた。作業は、農地の地権者の指示に従うとしている。

(5) サークルファームの農園利用料金（収穫物料金を含む）は、原則的に面積に応じて計算し、前払いとする。米一俵いくらではなくて、気候によって変動するので、面積によって変動することとした。 23 : 34

(6) 収穫物はサークルファームに帰属するが、事前に定めた日時までにサークルファームが引取らなかった場合は、所有権を失うとした。農家は30kg単位に袋に入れて出荷する。農地の地権者は、30kg単位で渡すので、サークルファームが取りに来て、サークルファーム側で分けて欲しいとしている。 24 : 33

(7) サークルファームと農地の地権者との間の仲介、調整、栽培指導等を行うコーディネーターを両者の合意により選定することができる。農地の地権者が、こまごましたことを指導するのは大変なので、コーディネーターが対応する仕組みにした。 25 : 32

サークルファームをやってみて、当初心配したのが、若い女性12人に男1人のグループで、今まで田植えをやったことが無いというので、どういうものかと見ていた。400m<sup>2</sup>の小さな田んぼであったが、結論から言うと「そんなに問題なくできる」という印象である。植え方を教えて、ひもの持ち方を教えて、慣れてくると見てるだけで進み、田植えは2時間で終わってしまった

た。苗は、農家が準備してくれる。日常の仕事は、事務をしている人たちで、良い気分転換になったと思う。

後は、農家が肥料やりや水の管理を稲刈りだけを担当する。栽培の途中で見に来て、ネットにアップしていた。地方都市との交流ということでは、良いことだと思う。刈り取りは、4時間ほどかかった。刈ったあとは笠懸をする。手で刈って縛るのは、難しかった。次は、パイインダーを準備すれば良いと思った。今回は、農家の応援者が支援した。 33 : 39

その後、天日干しで3週間ほど、干して、もみすりをして、玄米にして、農地の地権者の納屋で30kgの袋で5袋を渡した。天日干しの方が、味が良いとされる。 36 : 30

もみすりでは、6名の方が参加した。受け取った150kgの玄米は、自分たちで分けて、近くのコイン精米機で精米した。当日来れなかった人には、宅急便で送っていた。一人当たり11kgのお米が手に入った。人件費や交通費を考えたら高いお米になっているが、「カルチャースクール」と思って、体験にお金を掛けた。コト消費、トキ消費にお金を掛けたと考えて欲しい。

継続的にはできなかつた。その理由は、コーディネーターをした仲間が、その年の冬にすい臓がんで亡くなってしまったからだ。

石井さんの館山でも出来そうなモデルである。

10人くらいでは、500m<sup>2</sup>位の小さな田んぼがよいと思う。今は、埼玉では3,000m<sup>2</sup>の田んぼがほとんどであるが、500m<sup>2</sup>位というと未整備の田んぼで機械が入りにくいところを選ぶと良い。 41 : 21

10名くらいであると、農家の納屋で休むこともできるし、着替えでは、コーディネーターの家を借りておこなった。10名は、特別な場所を準備しなくても済む人数である。

1反(約990m<sup>2</sup>)当たり10万円が粗収入である。コーディネーター料も同じ10万円とした。実際には、400m<sup>2</sup>であったので8万円を支払った。 42 : 42

田植えは比較的簡単であるが、稲刈りは機械を準備してあげた方が良いと感じた。

51 : 19

### **同友会の提言や埼玉県の役割 53 : 02**

当時、経済同友会が『日本農業の再生に向けた8つの提言』というのを出した。提言の中で、産業界が率先して取り組むものとして「社員食堂等における国産農産物の消費拡大」及び「社員による農山村ボランティア参加支援」が提言されている。経済同友会の担当者に『サークルファーム』の提言を説明したが、「私たちはつくるだけで、取り組みは企業に任せている」との回答であった。

埼玉は東京の隣にある。都会の人をこういう形で呼べる位置にある。埼玉が音頭を取って、埼玉が練習の場になってサークルファームに取り組むことができないか検討したが、県を動かすことはできなかった。埼玉で成功して、東北、新潟へ展開して欲しいと考えたがなかなか実現できなかった。。

また団塊世代の活用も考えた。団塊世代の昭和20年代の人の半分は、農家出身ではないかと考えた。埼玉や東京に住んでいて、退職をした方の中に、出身は東北ですという方が多い。その人たちが子供の時代は、田植えも手植えだった。農業機械がまだ普及していなかつた時代で、手作業

の田植えや稲刈りの農作業を十分体験している。まさに、そういう人達は、サークルファームのコーディネーターとして適任でないかと考えた。

### **自立的増殖への誘導**

サークルファームの自立的増殖を考えた。コーディネーターが、サークルと農家間の調整や栽培指導などに3年位取り組めば、サークルファームは自立するのではないかと考えた。栽培技術や、運営能力が向上し、農家と直接交渉し、サークルファームの運営ができるようになればと考えた。

サークルファームの人達が、何年も取組み、テキパキとできるようになれば、コーディネーターの役割は終わる。そうなると、新しいサークルのコーディネーターに移ることがきる。一つ目は埼玉で、次は東北へと移っていくことができる。ネズミ算的に増えることを期待した。

こういう事を、都会の若い人たちに伝えることが出来ないか。潜在的には、やりたい人はいるような気がする。どの農家が受け入れてくれるか。両者の情報をいかに繋ぐかは課題である。インターネットを自分は使えないが、インターネットの活用ができないかを考えた。農家から行っても、農家は基本的に待ちなので、上手くつながらない。

**司会（吉池座長）**：サークルファームはいつのことか。 1：00：01

**回答（菰塚講師）**：2011年の6月に取り組んだ。

**司会**：千葉の館山でやろうとしたら、1泊してということも考えられるが。

**回答**：宿泊とセットでコーディネートすることも考えられるのではないか。 1：04：30

**意見（小平）**：石井さんの館山で取り組めないか。

**回答（石井）**：ビジネスモデルとして、体験農業を考えている。

**司会（吉池）**：次の開催は。2月の5，6，7日は、地方創生EXPOが幕張である。2月の21日（金）18じ30分で、お願いしたい。

**意見（小平）**：今回は、平田先生に海外の事例で、日本で取り組めそうなビジネスモデルについて話をしたい。

以上